

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 藤縄 康弘



学位申請者 佐藤 宙洋

論文名 現代ドイツ語における接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合

< 審査結果 >

審査委員会は藤縄康弘を主査とし、副査には学内から成田節・浦田和幸・川上茂信の各氏、および学外から清野智昭氏（学習院大学教授）が加わって 2023 年 3 月に設置された。各審査委員は、提出された論文を精読し、その内容を詳細に検討した上で 2023 年 9 月 8 日（金）午後 2 時より約 2 時間、学位申請者に対する公開の最終審査をオンライン会議形式で（台風接近のため当初の対面形式から急きょ変更して）実施した。その結果、本論文が本学大学院の定める学位授与基準を単に満たすだけでなく、以下に述べるとおりの優れた学術性と従来の学説に修正を迫るといふ意味での独自性を有していることを確認した。このことから、審査委員会は全員一致で、佐藤宙洋氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であるとの結論に至った。

< 論文概要 >

本論文は現代ドイツ語において類義の接頭辞動詞（例：**erblühen**「咲き始める」）と不変化詞動詞（例：**aufblühen**「咲き始める」）が「競合」するケースを対象に、コーパスを利用した事例調査に基づいて、従来の学説の妥当性を検証したものである。結論は次のようにまとめられる。

- ・ 同形の接頭辞と不変化詞が競合するケース（いわゆる分離・非分離動詞）においては、接頭辞動詞のほうが不変化詞動詞より比喩的・抽象的な意味を表す傾向がある。
- ・ 同じケースにおいて接頭辞動詞がより結果的、不変化詞動詞がより過程的であるとの、先行研究でしばしば指摘されてきた差異は、主要な 3 点の接頭辞・不変化詞のうち **durch-**で確認される一方、他の 2 点（**über-**、**unter-**）では反例が観察される。
- ・ 接頭辞と不変化詞に形態的な対応が無い競合でも、事例全般にあてはまる規則的な差異は見出し難い。たとえ差異が認められる場合でも、それは一部の先行研究の主張どおりに接頭辞動詞と不変化詞動詞の構造の違いに還元できるようなものではなく、接頭辞、

不変化詞、動詞の語義といった具体的・個別的な条件に負っている。

- ・ 接頭辞と不変化詞が同形である競合と、接頭辞と不変化詞に形態的な対応が無い競合とは異質の現象である。その点で、接頭辞と不変化詞の異同に関わらず接頭辞動詞と不変化詞動詞が各々類として一定の機能を有するとする一部の先行研究は妥当でない。

この結論は一見華やかさに欠けるが、大量の実例の極めて正確な分析を通じて、従来の学説に見られた過度な一般化を修正した点に小さからぬ学術的価値が認められる。

本論文は 6 章から成る。以下に各章の内容をまとめる。

第 1 章「はじめに」

現代ドイツ語では、Die Rose **erblüht**. と Die Rose **blüht auf**. (< aufblühen) 「バラが咲き始める」や Er **durchbohrt** die Wand. と Er **bohrt** die Wand **durch**. (< durchbohren) 「彼はその壁に穴を開けた」のように接頭辞動詞と不変化詞動詞が同じ意味で用いられることが少なくない。このような「競合」に関して、先行研究では両表現の間に内容上の差異が規則的に観察されるという記述がしばしば見られる。そこで、そうした「規則的な内容的差異」が実際にどの程度認められるのかを検証するという本論文の問題設定が提示される。

次にドイツ語文法論で「前綴り」と一括されることもある接頭辞（いわゆる非分離前綴り）と不変化詞（いわゆる分離前綴り）の概念を整理し、形態論的、音韻論的、統語論的観点から接頭辞動詞をタイプ A（接頭辞が **be-**, **er-**, **ver-** などの拘束形態素）とタイプ B（接頭辞が **durch-**, **über-**, **unter-** などの非拘束形態素）に、また不変化詞動詞をタイプ C1（不変化詞がタイプ B と同形）とタイプ C2（不変化詞がタイプ C1 以外）とに分ける。その上で、タイプ A（例：**erblühen**）とタイプ C2（例：**aufblühen**）の比較、およびタイプ B（例：**durchbohren**）とタイプ C1（例：**durchbohren**）の比較という二重の分析の枠組みが示される。

章の最後に、競合関係を「ある同じ語義を持ち、前綴りの点でのみ異なる複数の動詞の関係」と定義した上で、文法書、造語論の文献、さらに類義語辞典などにおける（この定義から外れるものも含む広義の）競合関係にある動詞を概観している。こうして競合が現にタイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞、およびタイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化詞動詞との間で起こることを確認することで、上述の二重の分析枠組みの妥当性を示している。

第 2 章「先行研究の見解」

接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合に関して、先行研究がどのような規則的な内容上の差異を認めてきたかを検討している。まず、タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞に関しては、開始相での競合において前者は瞬間的な開始、後者は非瞬間的な開始の表現

であるとする Erben (¹¹1972) の記述を紹介する。次に、タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞に関しては **durchbohren** と **dur**ch**bohren** 「穴を開ける」を例に論じる Streitberg (1895) に始まり、その後も多くの文献で言及されている差異、すなわち接頭辞動詞では結果が強調され、不変化詞動詞では過程が強調される、という記述を取り上げ、これは Vendler (1957) による動作相 4 分類中の Achievement (過程を捨象した結果への到達) と Accomplishment (結果に至る過程も含めた達成) の対立に相当すると指摘する。タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化詞動詞の競合に関してはさらに、前者は抽象的・比喩的な意味で用いられる傾向が、後者は具体的・原義的な意味で用いられる傾向があるとする見解を検討し、これも本論文で検証する観点のひとつとしている。最後に、接頭辞動詞一般と不変化詞動詞一般に関して、前者は要約的(概観的)な事態把握、後者は連続的な事態把握による表現であり、これは接頭辞動詞と不変化詞動詞それぞれの構造の違いによるとする Dewell (2011, 2015) を紹介する。

これらの検討を踏まえ、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合において「過程性および抽象性・比喩性における差異はどの範囲の競合で規則的に認められるのか」「過程性および抽象性・比喩性における差異以外に規則的に認められる差異はあるか」という検討課題を提示する。

第 3 章 「事例研究に向けて」

3.1 では事例研究の調査対象となる動詞を挙げる。まず、接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合を (i) タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞の競合と、(ii) タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合に大別したことを踏まえた上で、先行研究での取り扱いや動詞の自他などを考慮し、(i) の代表例として以下の 5 ペアを選定する。

durchbohren, **dur**ch**bohren** 「～を穿つ」; **durchblättern**, **dur**ch**blättern** 「～を通読する」;
übersiedeln, **ü**ber**siedeln** 「移住する」; **überführen**, **ü**ber**führen** 「～を移送する」; **unterschieben**,
unt**erschieben** 「～を…に押し付ける」

また (ii) に関しては、(i) のように接頭辞および不変化詞に基づいて競合事例を選ぶことは不可能なため、ある基盤動詞を共通して持つ一連の接頭辞動詞と不変化詞動詞を精査して競合例を洗い出すという方法を取る。先行研究での取り扱いや結び付く接頭辞・不変化詞の分布などを考慮し、以下の 3 群を選定する。

blühen 「咲く」群 : abblühen, aufblühen, ausblühen, erblühen, verblühen

klingen 「鳴る」群 : abklingen, anklingen, aufklingen, ausklingen, erklingen, verklingen

lügen 「嘘をつく」群 : anlügen, belügen, durchlügen, erlügen, vorlügen, zusammenlügen

3.2 では実例の収集にマンハイムドイツ語研究所の Deutsches Referenzkorpus (ドイツ語

参照コーパス)と検索エンジン COSMAS II を利用すること、検索の方法や結果の出力、有効データの収集やその分析を通じて語義抽出へと至る具体的な方法・手順等が述べられる。

3.3 では、実例の観察において過程性と比喩性・抽象性を判断する基準を詳細に論じている。過程性に関しては de Swart (1988 他) と Smith (1997) などを土台とし、事例の観察を通じて、当該文の基底に一定の「事象性記述 (eventuality description)」を想定する。そこでは、過程性を含む Accomplishment とこれを含まない Achievement の判別に重要な持続性を抽出する手順として、時間の副詞規定 (時点表現, 所要時間表現, 持続時間表現) との共起における文意味解釈, 現在時制における「現在読み」「未来読み」などの解釈, 開始・終了を表す動詞による支配 (つまり「～し始める」「～し終わる」が可能か) などの基準も挙げている。さらに抽象性・比喩性に関しては、選択制限の逸脱による動詞の意味推移の頻度により、競合する動詞のどちらがより抽象的・比喩的な表現かを判断する旨を述べる。

第 4 章 「事例研究 I : タイプ B 接頭辞動詞と同形のタイプ C1 不変化詞動詞の競合」

この章では、第 3 章前半に挙げた 5 組の接頭辞動詞と不変化詞動詞の事例を、ひとつの動詞につき最大 200 例抽出し、3.3 で提示した基準に基づいて、抽象性・比喩性および過程性の観点からの差異を考察する。その際、各事例における動詞の語義を丁寧に分析し、同義と見なせるペアのみを競合関係の考察対象としている。また、補足的に地域差についても検討している。

比喩性・抽象性に関しては、durchbohren/durchbohren「～を穿つ」や überführen/überführen「～を移す」で接頭辞動詞のほうが不変化詞動詞より比喩的・抽象的であると認定している。確かに、durchblättern/durchblättern「～を通覧する」など比喩性・抽象性の差がほとんど関与的でない競合も見られるが、不変化詞動詞のほうが接頭辞動詞よりも比喩的・抽象的であるような逆転現象が見られないことから、タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の競合においては、接頭辞動詞のほうが比喩性・抽象性が高い傾向にあると結論付ける。

過程性、および過程性と対をなす結果性に関しては、durchblättern/durchblättern「～を通覧する」と durchbohren/durchbohren「～を穿つ」の競合では接頭辞動詞により強い結果性、不変化詞動詞により強い過程性が認められるものの、übersiedeln/übersiedeln「拠点を移す」のように過程性の差異が認め難いものもあり、さらに unterschieben/unterschieben「～に～をこっそり押し付ける」のように不変化詞動詞のほうが結果性の強い場合もある。このような分析結果に基づき、タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の競合では、接頭辞動詞により強い結果性、不変化詞動詞により強い過程性を一般的に認めることは不可能であり、そのような競合はせいぜい durch-接頭辞動詞と durch-不変化詞動詞に限られると結論付けている。

なお、地域差については übersiedeln/übersiedeln「拠点を移す」において接頭辞動詞は主にオーストリアで、不変化詞動詞は主にドイツで用いられるという傾向が見られる以外、地域差の関与の程度はあまり高くないとの見通しを述べている。

第 5 章「事例研究Ⅱ：タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合」

この章では、第 3 章後半に挙げた 3 群の接頭辞動詞と不変化詞動詞の事例を、ひとつの動詞につき最大 200 例抽出し、各動詞の事例を精査して、どの接頭辞動詞のどの語義がどの不変化詞動詞のどの語義と競合すると見なせるかを慎重に判断する。例えば、*blühen*「咲く」群の 5 つの動詞では、〈咲き始める〉という語義の *erblühen* と *aufblühen* の競合、および〈咲き止む〉という語義の *verblühen* と *abblühen* の競合が分析対象となる一方、〈咲き終わる〉という語義の *ausblühen* と〈咲き止む〉という語義の *verblühen* と *abblühen* とは一見、競合するようであっても、*ausblühen* が含意する満開状態の経過を *verblühen* と *abblühen* は必ずしも含意しない点で語義が異なるため、競合関係にはないとする。このように厳しく絞り込んだ競合事例について 3.3 で提示した基準を用いて抽象性・比喩性および結果性・過程性の観点から差異を考察している。

比喩性・抽象性に関しては、〈咲き始める〉という語義の *erblühen* と *aufblühen* の競合などで、不変化詞動詞のほうが動詞の意味推移を起こしやすく、より比喩的・抽象的な表現である一方、〈咲き止む〉という語義における *verblühen* と *abblühen* の競合では逆に接頭辞動詞のほうがより比喩的・抽象的な表現である。さらに〈～に嘘をつく〉という語義における *belügen* と *anlügen* の競合では、比喩性・抽象性は関与的でないという分析結果も示される。そこから、タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合において比喩性・抽象性の差異は、認められることが多いものの、事例の全体に規則的に当てはまるような傾向は認め難いと結論付ける。

また、結果性・過程性については、例えば *aufblühen* と *erblühen* の競合ではどちらの動詞も [+持続的] (つまり *Accomplishment*) であるのに対し、*aufklingen* と *erklingen* ではどちらも [-持続的] (つまり *Achievement*) であることから、タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合に結果性・過程性は非関与的であるとの分析結果を示している。

なお、比喩性・抽象性以外には、選択制限、地域差、有標性などに差異は認められるものの、いずれも事例全般に共通するようなものではなく、それぞれの競合において個別的に観察される差異であるとしている。

第 6 章「おわりに」

最終章では論文全体の成果を振り返り、以下のような要点を挙げている。

- ・ タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化詞動詞の競合においては前者のほうがより比喩

的・抽象的な傾向にある。

- ・ 接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合において前者がより結果的であるという差異は、タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化動詞の競合一般ではなく、durch-接頭辞動詞と durch-不変化詞動詞の競合に限って観察される。
- ・ タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合には、両タイプに規則的に見られるような差異は見出し難い。また両タイプの競合における差異は、一部の先行研究で指摘されるように接頭辞動詞と不変化詞動詞という構造の違いに還元できるとは言い難く、どの接頭辞とどの不変化詞の競合か、またどういった語義での競合かという具体的な個別的な条件による。
- ・ 接頭辞動詞と不変化詞動詞の競合は、タイプ B 接頭辞動詞とタイプ C1 不変化詞動詞の競合と、タイプ A 接頭辞動詞とタイプ C2 不変化詞動詞の競合に分けて考える必要がある。

最後に競合における比喩性・抽象性における差異、および結果性・過程性の差異の理論的な根拠をさらに追及する必要があるという今後の課題が述べられている。

< 審査概要および評価 >

審査委員会はとりわけ次の点を本論文の優れている点として高く評価する。

1. 大量のデータの分析を通じて先行研究や従来 of 辞書記述を批判的に検討し、考察対象について言語事実に即した非常に正確な記述を行っている。それにより、従来 of 学説 of 不正確な部分を炙り出し、修正 of 提案をしている。
2. 関連文献から抽出した大量 of 用例とコーパス調査に基づく実例を丁寧に読み込み実証的に考察している。実例 of 解釈・分析が非常に正確であり、そこから引き出す結論も極めて堅実なものである。
3. 先行研究を適確に消化して分析 of 土台となる理論的道具立てを整えている。
4. 語義を見極める方法・手順をよく考えて整理し、それに沿って例文を分析している。
5. 文章がよく練られていて非常に読みやすい。

その一方で以下 of ような問題点も指摘される。

1. 理論的道具立てが事例 of 分析で十分に生かされていたか。英語 of 文献に基づいて理論的枠組みを整理しているが、ドイツ語 of 分析にとって妥当か。
2. 実例をある程度見た上で、判断基準を設定してもよかつたのではないか。
3. コーパスによるデータ収集 of 手順 of 説明が不十分ではないか。データ of 量が十分と言えるか。
4. 結論が地味にすぎないか。データ of 分析・考察から引き出した「仮説」をもって「結論」

とするのは論文としてやや物足りなさを覚える。

5. 動作主と対象という意味役割を定義する際に理論的一貫性が欠けている。
6. 個々の語義を認定する際、設定した基準の適用に柔軟さが欠けていないか。その結果、語義の区分が細かくなりすぎていないか。

とはいえ、これらは本論文の成果を根本的に揺るがすようなものではなく、むしろ、本論文が提起する問題の価値や出来栄えの高さを認めた上での注文や改善提案である。

最終審査で佐藤氏は自身の成果をあらためて要約して述べたが、その説明は要領を得たものであった。また、審査委員からの指摘や質問に対しても、問題点は問題点として認めた上で今後の展望を示すなど、率直かつ建設的な姿勢が顕著であった。

こうしたことから、審査委員会は、冒頭で述べたとおり全員一致で、佐藤氏が本論文をもって博士（学術）の学位を受けるのが相応しいと判断した。